

政治好き

世の中の人はずいぶん政治が好きなんだと思う。管理人は政治にはあまり関心がない。全くないと言った方が良くかもしれない。選挙に行ったことがない。選挙に一度も行ったことがないというと驚かれる。まるで不心得ものであるかのように非難する人もいる。一度学生さんに、「選挙に行ってくださいよ。」と、かみつきそうな顔で言われたことがある。何故いかないのかというと嫌いだからだ。何故嫌いなのかと問われると少し困る。好き嫌いに理由はないし、理由を説明されたから納得できるというものでもないだろう。だから、積極的にその理由を説明したことはない。

こういうことは、立場を変えてみても同じことだ。政治や選挙が好きなのは、その理由を納得できるように説明可能だと思っているらしいが、彼らの説明は私にはとても納得いくものではない。だからと言って、政治好きをやめろという気にもならない。好き嫌いというのはそういうものだからだ。ただ、不思議なのは、彼らがこういうことを論理的に説得できると思い込んでいることだ。

子供のころは口が達者で理屈つぼかったから、そのうち政治運動などに夢中になるのではないと言われて。政治家やイデオロギーを強く主張する人は、理屈っぽく論理的だという誤解が一般にあるようだ。私はそうではないと思う。政治好きの人の根底にあるのは情緒とか騒動とかそういうものであって論理ではない。政治思想・イデオロギーの根底にあるのは、ある種の情緒に対する共感なのだ。人には趣味趣向のちがいがあつて、育ってきた歴史的な背景・文化、現在の社会的・経済的立場の違いがある。こういうものは、何かの政治的決断をめぐって対立構造ができる要素だ。こういう違いを目立たないように薄めることはできるがなくなることはないだろう。そういう場合は、利害が極端に偏らないように上手に妥協してもらいたいと思う。これが現実の政治の機能だろう。こういうところに、情緒をベースにした思想のようなものを持ち出して、正義を主張されても困る。妥協が出来なくなる。迷惑な話だ。だから、それなりの不満を残しながらも、適当に妥協が成立しているのならば、わざわざそこに私が出ていく必要はないと思う。これが、選挙に行かない理由だ。

良くあるのは、民主主義というのは民意による行政だから、民意を集約する立法府の選挙には、民衆個々が参加しなければいけないというのがある。私はこれを聞くと、本気でそれを言っているのかと逆にたずねたくなる。もし、民意を直接に反映した行政が行われなければならないのであれば、代議員制（間接民主制）はなりたない。代議員制は直接民意を反映しないからだ。技術的に直接民主制ができないから、代替として間接民主制を行うという説明も違う。完全にランダムに抽出出来れば、国民の0.01%に満たない人間を抽出して民意を問うても、国民の意見を代表することはできる。コンピューターの時代、そんなことは

難しくない。多くの国で間接民主制が採られるのは別の理由だ。行政には一貫性が必要だ。政策にはさまざまなものがありそれらが相互に関係している。そういうものを一体として捉えて、過去の整合性も考慮しながら、未来に対する判断をしなければならない。民意は情緒だから揺れ動く。全体としての一貫性などは考慮しない。もし、民意に任せれば、個々の政策がお互いに矛盾し整合性がなくなり一向に政策が実現しなくなる。政策の揺れ動きのたびに、多くの人々が迷惑する。そこで、政策セットを提供する政党を選ぶような代議員制による選挙がおこなわれるのだ。つまり、現におこなわれている政策に対する信認あるいは否認が問われるのが選挙だ。これは与党について言えることだ。野党の方は、現に政策を実施していないのだから、その政策の信を問うようがない。世の中が安定して、与党に決定的な失政がない限り、普通は与党が信任される。これが選挙の意味だろう。つまり、投票という儀式によって、選ばれた政治家や政党の正当性が担保されるというわけだ。王政における王様だって、その統治の正当性が問われる。たいていの場合は、王権神授説のように、神によって王権の正当性が担保されるという論理構造になるのだが、一方で民衆による信任も現実に必要な。それが戴冠式のパレードのようなものだろう。派手な戴冠式に多くの民衆が参加することにより、当時の正当性が確認される。選挙というのは、王権における戴冠式のようなものだ。重要なのはそれによって正当性を認知し、それを選んだ国民に選択の責任を押し付けることだ。そうしないと、政治家はすべての責任を負うことになって、命がいくつあっても足りない。

戴冠式のパレードを見に行くか行かないかは私の勝手だろう。押し付けられるいわれはない。そういえば、親父は戦前何回か国家総動員法違反で警察に捕まっていたな。爺さんもそうだった。血は争えないと言えそうだが、少なくとも選挙に行かないことで官憲に捕まることはない。良い時代になったともいえる。

例によって、この文章は、わけのわからないことを言って、人を混乱させようとしているだけなのだが、具体的な例を挙げる。親父の友人に MT さんという人がいた。富山の生まれで、選挙のたびに出身地の村に帰る。選挙運動に参加するためなのだが、日ごろの言動からすると、彼が特定に政治思想を持っているようには思えない。なぜそんなに夢中になるのか訊いてみたら楽しいのだそうだ。皆で相手側を切り崩す作戦を練ったりしながら酒を飲む。選挙前日になるとかがり火をたいて道路や橋に立って、不審者が村に入ってこないか警戒する。それなりに面白そうだ。選挙の話題や政治の話題で、大真面目に正義を振り回している連中が新聞やテレビなどのマスコミにいる。本人は文化人と称する知的人間を気取っているようだが、それがその人間にとって面白いということだけに過ぎない。その感性は、MT さんと変わらないのだと思う。酒を飲むのは好きだが、政治の話などは酒のつまみとしてはろくのものではない。下らんことに突き合わさないでくれ。